

## 張廷済と古印

川合尚子

### 〔抄録〕

金石学者は、必ず篆刻を嗜み、その作品は、篆刻芸術として、書作品・印譜・交流などに活用された。張廷済もその一人だが、彼がどのような古印を収集・研究・制作し、交流してきたか、広く知られていない。その理由として、太平天国の乱に、自宅の清儀閣や八瓢精舎が戦災に遭い、文物や著作などが散逸してしまったことが原因である。

今回は、そこに鑑み、『清儀閣所蔵古器物文』第九冊（古印）と、張廷済死後、約百年後に発見された清儀閣旧蔵の古印や私印の印譜『清儀閣印存』と『清儀閣蔵名人遺印』も取り上げ、張廷済の古印研究・篆刻芸術とその交流を考察する。

キーワード 張廷済、金石学、清儀閣、印譜、印存

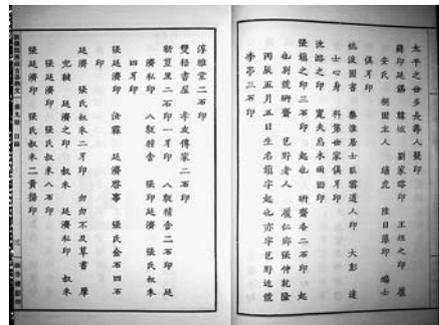
### 一、はじめに

金石学の一分野の印学は、北宋時代から始まり璽印・古印収集・印譜や著録が数多く著され、印学理論・印史などの学術的価値が印章にも持たれた。また、書作品に押すための印制作も盛んに行われ、古印から篆書法や篆刻法も研究され、篆刻芸術として実践と理論が確立した。特に、清代中後期には、官私璽印・封泥・碑版・器物・泉などの史料が大量に出土されたことで、金石学と共に印学・篆刻芸術もさらに発展を遂げた。

特に、清代中期に金石学者・書画篆刻家と有名な張廷済は、金石学の急発展の波に乗り、翁方綱・阮元等と学術・芸術共に交流を深めた。また、自宅の清儀閣や八瓢精舎を建て、文物収集・保管・鑑賞・研究に張氏一族ぐるみで励んだ。この環境で著されたのが、張廷済著『清儀閣所蔵古器物文』（全十冊）である。それは、文物から直に拓を取り、その余白に記載年月日と共に、文物入手経路・交流した人物などあかも日記のような内容で跋を付し、時代・文物の種類ごとに分類・整理されたものだ。金石学の著書には、文物の拓や図を付し、跋を記したのもあ

るが、そのような著書は少なく、文字ばかりの硬く重々しい内容のものが多く出現する中で、この著書は大変珍しい編集方法であった。また、よく整理され、目で見てどんな文物なのか分かりやすかったため、金石学を志す人々に珍重され、以後、金石著作の編集法の一つとして、取り上げられるようになった。この著書の第九冊には、張廷済が収集した古印が記録されている。そこには、印面と側款の拓が色鮮やかに取られ、余白に印材・印の語句について、印を巡って交流した人のことなどの跋が書かれている。金石学者は、必ず篆刻を嗜むことが一種のステータスとなっており、篆刻芸術として、書作品・印譜・交流などに活用された。張廷済も、その中の一人であるが、現在、彼がどのような古印を収集・研究・制作し、交流してきたか、まだ広くは知られていない。その理由として、太平天国の乱に、清儀閣や八瓢精舎が戦災に遭い、文物や著作などが散逸してしまったことが考えられる。

今回は、そこに鑑み、『清儀閣所蔵古器物文』第九冊(古印)と、張廷済死後、約百年後に発見された清儀閣旧蔵の古印や私印の印譜『清儀閣印存』と『清儀閣蔵名人遺印』も取り上げ、張廷済の古印研究・篆刻芸術とその交流を考察する。



図一 『清儀閣所蔵古器物文』第九冊目次



図二 『清儀閣所蔵古器物文』第九冊 P1-B、P2-A

## 二、印譜に残された張廷済の収集印

張廷済の古印や私印は、太平天国の乱の戦災で散逸し、現物を確認することは今では難しい。だが、戦火にも耐え、現在まで伝わった印譜で、その内容を確認することができる。

『清儀閣所蔵古器物文』第九冊(古印)には、張廷済が自ら印譜にし、跋を書いており、張廷済本人の考察や古印入手の経緯・交友などがよく分かる。『清儀閣印存』には、書作品や著書に押す私印が中心に印譜となり、『清儀閣蔵名人遺印』は、清儀閣に収蔵されていた名のある人の古印が印譜になっている。『清儀閣印存』と『清儀閣蔵名人遺印』は、まだ、広く知られていない史料である。この二冊の中に、『清儀閣所蔵古器物文』第九冊(古印)で記るされている印と同じものを発見した。

詳しい跋は書かれていないが、その内容については、『清儀閣所蔵古器物文』第九冊（古印）で確認できる。この三冊に共通する印を抜き出し、張廷済の印学について考察したいが、まず、『清儀閣印存』はどのように出版されたかを、題跋から考察する。

『清儀閣印存』—題・序—

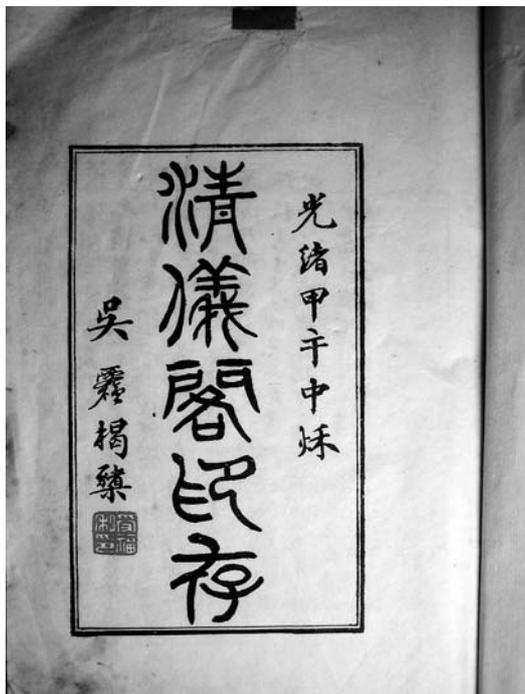
【題】

光緒甲午（光緒二十年 一八九四）中秋

清儀閣印存（篆書）

吳受福（？—一九一五） 楊緒

受福私印



図三 『清儀閣印存』題字

この題は、『清儀閣印存』編集時に表題を吳受福（？—一九一五）が書いたものである。『清儀閣印存』と『清儀閣蔵名人遺印』は、鄧実（二八七七—一九五二）が創設した神州国光社で編集・出版された著書である。吳受福は、他の張廷済関係著書にも題跋を書いている。その一つに、『清儀閣金石題識』がある。ここで、少し吳受福を紹介しよう。

吳受福（？—一九一五）浙江嘉興の人。字は介茲。号は子梨、璉軒、晋仙、苴珊、老芥、老芥士。私諡は貞孝先生（『貞孝先生詩文集』にある）。室名は小種字林（『小種字林試帖偶存』にある）。著には『古禾雜識』、『石鼓文集字聯』、『遠覽編』がある。輯には『得酒趣齋詩鈔』、『環碧主人贖稿』、『蘇門山人登嘯集・詩鈔』、『蓮鷺双谿舍遺稿』等がある。合刊は『小種字林叢刻』である。光緒己卯（二八七九）の挙人。

彼は、金石学関係の著書を出版し、鄧実や褚德彝とも学術的交流が深いようで、今後は、彼の著作にも当たり、張廷済から受けた影響、彼と同時代の金石学者・書画家などとの交流はどうであったかを詳しく調べたい。

また、『清儀閣印存』と『清儀閣蔵名人遺印』の編著者鄧実は、中国国学の普及のため国学保存会（一九〇五年創設）を組織し、中国古典の収集にあたり、国学蔵書楼として風雨楼を設けた。彼自身、張廷済に関心があったのか、この他に、張廷済関係の著作を風雨楼に収蔵・出版した。その一つに『徐籀莊手写清儀閣古印』がある。題は、王大圻（生卒

不明) が篆書で書き、序文を鄧実が記している。

【題】

徐籀莊手写清儀閣古印 (篆書)

風雨樓秘笈留真之九

北鉄王大斫猪

王冠山 (印)

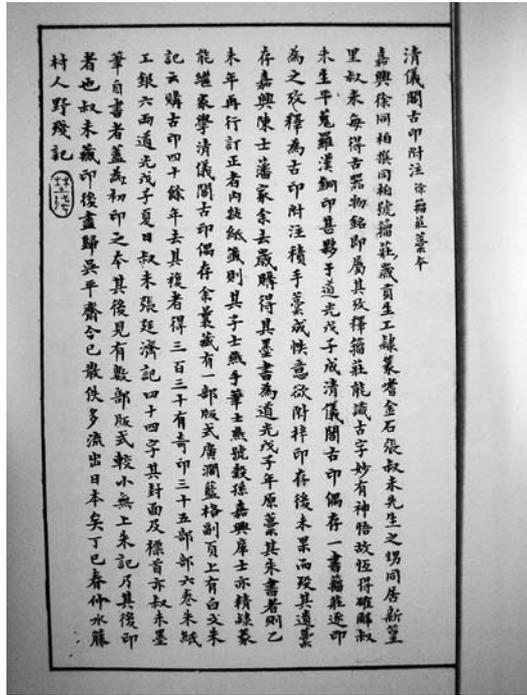


図四 『徐籀莊手写清儀閣古印考釈』 題字

「風雨樓秘笈留真」は、全十二種あり、風雨樓の蔵書の中でも珍重される古典の書物が出版されている。『徐籀莊手写清儀閣古印』は、その中で九番目に刊行された。ここで、伝記は少ないが王大斫のことも紹介する。

王大斫(生卒不明)字は冠山、号は爻鉄、呉県の人、篆刻をよくした。王大斫も、金石学に志した人と考えられるので、今後、彼の書いた書物を検索し、鄧実とその周辺の人々との交友関係も調べてみたい。また、先に少し述べたが、これらの貴重書を編集出版した鄧実についても紹介する。

鄧実(一八七七一—一九五二)広東順徳の人(生まれは上海高昌郷)。字は稟生、秋枚(『広益叢報』等『神州国光集』に見える)、別号は枚子(『国粹学報』などに見る)、野残、別署に枚君(一九〇三年『政芸通報』、『秋夜檢亡弟秋門遺詩』の題に見える)、鶏鳴(一九一一年『民国報』に見える)、室名は鶏鳴風雨樓、風雨樓(一九〇五年国学保存会を設立し、国学蔵書樓を設け、名を風雨樓とした。一九四〇年上海静安寺路(今の南京西路)に住まいを建て榜名ぼうめいした。『風雨樓叢書』にある)、また、鶏鳴風雨樓の主と自署し、名を鄧枚叔(『江左十年目略記』に見える)。経学家の簡朝亮の弟子。国学保存会を組織し、『国粹学報』を創刊。国粹主義を宣伝する。又『国粹叢書・叢編』、『国学教科書』、『国学講義』等を編集した。後に神州国光社を設立し、黄賓虹と『美術叢書』を編集する。



図五 『徐籀莊手写清儀閣古印考釈』序文



図六 『清儀閣印存』序文

鄧実の働きで、散逸した張廷済の書物が復活し、再び世の人々の目に触れ、現在まで張廷済の生きた時代の学術・芸術を学ぶことが出来るようになった。彼は、金石学だけに止まらず、あらゆる学術・芸術に精通しており、張廷済の金石学に関しても跋の中で評価しており、張廷済からの影響や関係性を調べることも今後の課題にしたい。

今度は、『清儀閣印存』の序文から、どんな経緯・意図があつてこの著書が出版されたかを考察する。序文は、褚德彝が書いている。

【序文】

〈白文〉

清儀閣所藏古器、庚申劫後、散佚殆尽。光緒甲午余在禾中、見粥古人処有叔未先生遺印二十余鈕。謂段于張氏者半屬黃楊・象牙、拓印成譜印此冊也。雖篋里諸印未爪尽于此。然兵燹之余、其後人尚能保持、勿告亦幸事也。秋枝先生得此、見亦為書願未于余紙。

甲寅四月六日褚德彝記于海上厲廬。 [松窓(印)]

〈書き下し文〉

中有蘇齋墨緣、為翁覃溪旧物宝彝齋印乃嘉興方辺御物誤印于此。松窓又記。清儀閣所藏古器、庚申劫後に散佚し殆ど尽く。光緒甲午、余は禾中に

在りて、弼古人の処、叔未先生遺印二十余鈕有るを見る。謂へらく段ずるに張氏の者は半ば黄楊・象牙を属す印を譜と成すはこの冊なり。篁里と雖も諸の印は未だここに尽く爪まず。然も兵燹之余、その後人は尚ほ能く保持す、亦幸ひの事なりと告ぐこと勿かれ。秋枝先生此を得、見ても亦書顛の為に末は余紙にす。

甲寅四月六日 褚德彝記す。海上厲廬に于ひて。

中に蘇齋の墨縁有り、翁覃溪旧物の宝彝齋印は乃ち嘉興方辺の御物の為に、此に印を誤るなり。

松窓又記す。

〈現代語訳〉

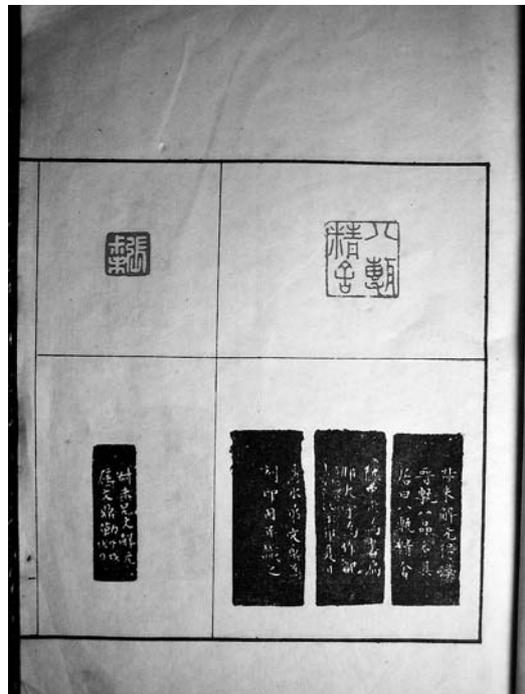
清儀閣所蔵の古器は、庚申(咸豊十年 一八六〇 太平天国の乱)の戦乱後、散佚し殆ど無くなつてしまつた。光緒甲午(光緒二十年 一八九四)に私(褚德彝)は、弼古人(人物不明)の所で叔未先生(張廷濟)の遺印二十余鈕を見た。大別すると張氏の印は、黄楊・象牙があり(それらを)拓して印譜にしたのが本書である。篁里(現在の浙江省嘉興市新篁鎮)でも多くの印は、まだすべては、ここに集まつてはいない。しかし、戦乱の後、後の人により今もなお、大切に保持されたものである(印が現存できたことは)なんと幸運な事ではないかと告げてはいけない。秋枝先生(鄧実)は、これを得て、見てもまた、このまま鑑賞できるように、(印・拓以外の)残りの部分は、余白にした。

甲寅(中華民国三年 一九一四)四月六日 褚德彝記す。海上厲廬

(仮住まい)にて。

(本書の)中には、蘇齋(翁方綱)との墨縁が窺える。翁覃溪(翁方綱)旧物の「宝彝齋」の印は、これこそ嘉興の御物であるために、誤つて本

書に印してしまつた。松窓又記す。



図七 『清儀閣印存』 P1-A

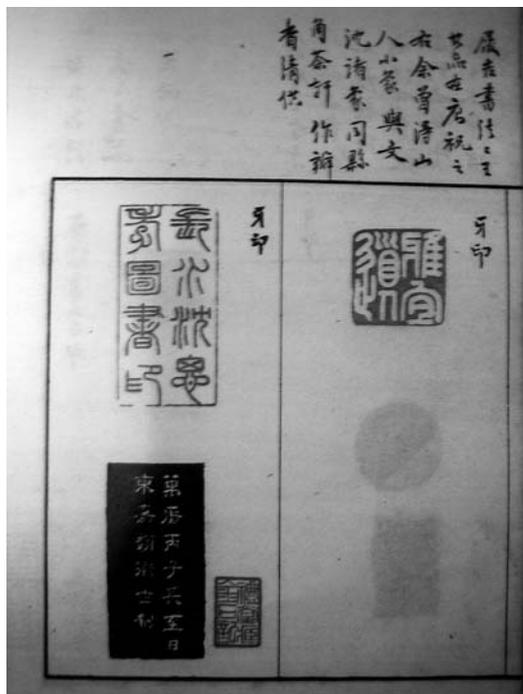
『清儀閣印存』は、題跋と印譜のみで、印の詳しい注釈は、記されていない。それは、入手したままの印譜を保持するためだという。なかなか手にすることの出来ない清儀閣旧蔵の印を見ることができ、印譜にできたのは、太平天国の乱の戦災の後、人々が大切にしていたお陰であつた。また、この中に翁方綱旧蔵の印が紛れ込んでいたことを詫びている。しかし、これも、張廷濟はじめ嘉興全体が翁方綱と親しく交流していたことが分かる。収録されている印も、張廷濟が書作品などに使用していた私印が殆どで、『清儀閣所蔵古器物文』第九冊(古印)にも載っていない印もあり興味深い。また、ここで、褚德彝についても紹介しよう。

褚德彝（一八七一—一九四二）浙江余杭（今の杭州）の人。原名は德儀、名を德彝と改めた。字は松窗、守隅、号は礼堂、里堂、公礼、籀遺、漢威、又の号は竹尊宦、舟枕山民、松窗逸人。室名は角茶軒。金石の考証に精しく、尤も篆刻に巧みで、初めは浙派を本とし、後、秦漢璽印を潜研した。また、梅をよくした。著には『金石字録続補』『竹人読録』『松窗遺印』等がある。『清儀閣所藏古器物文』にも、序跋や題字を添えている。また、張廷済旧蔵の名人遺印の印譜『清儀閣蔵名人遺印』にも、余白に跋を書き入れている。

彼は、古書店・骨董店や友人宅で偶然にも張廷済旧蔵の文物や著書を発見することが度々ある。しかし、自ら入手することは少なく、交友のある人物が入手したものを鑑定し、分類・整理して、商務印書館や神州国光社などで無事出版されるまで編集のサポートをしていたようである。

実際に、『清儀閣所藏古器物文』の原本は、徐曉霞（生卒不明）が上海の古書店で偶然に入手し、これを褚德彝が整理し、商務印書館の張元済の手によって出版された。『清儀閣印存』も印譜は、鄧実が入手し、褚德彝は、印の現物を友人宅で目の当たりにし、その知識で印譜を分析している。『清儀閣蔵名人遺印』の印譜も鄧実が入手し、褚德彝は、題字と印について考察した内容を余白に書き入れている。

散逸した張廷済の書物が再び世に出ることできたのは、鄧実や張元済のような出版社と、原本を幸運にも入手できた徐曉霞のような人、褚德彝のように金石学に詳しく張廷済を追いかけ研究に励んでいる人の熱意の賜物であろう。



図八 『清儀閣蔵名人遺印』一部分

それから、『清儀閣蔵名人遺印』は、張廷済の甥徐同柏が印一つ一つに使用している印材を示した題を書いている。まさに印学の視点から見ていることが分かる。一部張廷済が書き入れているところがある。この印譜の原本は、張廷済が存命している頃のものである。前にも述べたが、余白には、褚德彝の筆跡で印について考察した書入れがある。また、『清儀閣所藏古器物文』第九冊（古印）に載る印以外のものが載り、張廷済の古印収集の幅広さがよく分かる。序跋は無いが、表紙に褚德彝が書いた題字がある。その内容は、次のとおりだ。

『清儀閣藏名人遺印』

【題】

清儀閣藏名人遺印 (隸書)

徐籀莊 (徐同柏) 題

風雨樓 (鄧実) 得此付裝屬。

褚德彝署 甲寅 (中華民國三年 一九一四) 閏五月



図九 『清儀閣藏名人遺印』 題字

短い内容であるが、貴重な情報が記されている。まず、徐同柏が印に題を書いていること、次に、鄧実がこの印譜を入手して本著にしたこと、そして、褚德彝が題と書き入れをしていることだ。ここで、徐同柏についても紹介しよう。

徐同柏 (一七七五—一八六〇) 字は寿藏、春甫、号は籀庄又は少孺。原名は、大椿。張廷済の甥。張廷済に指受され、六書篆籀を精研し、文物の文字・時代等の考証を得意とし、張廷済は文物の考証を主に彼に任せていた。

また、張廷済は、文物の代金を徐同柏と出し合って、一緒に購入したという記事もある。文物を求めて様々な地域へ出掛けるときは、徐同柏も連れて行って購入したという。張廷済は、徐同柏を非常に可愛がり、徐同柏も張廷済を尊敬し、学問であり趣味の金石学や古器物の収集、考証から同じ敷地内に住んでいたこともあり生活の全てを共有していた。

徐同柏は、篆刻をよくし、張廷済の印は彼が刻したものが多くといわれている。張燕昌らとも交流し、残碑零碣・井欄橋柱・瓦当壘甄等の考証に取り組んだ。著作には、『從古堂款識積文』等がある。同じ趣味や学問や何から何まで共有できる仲間がいると楽しく、このような家族関係が、張廷済の金石に囲まれた生活をより豊かなものにした。

本書での徐同柏の役割は、印を印学的に分析し印材を明らかにしていること。そして、褚德彝による約百年後の時代から見ても考察した書き入れから、散逸した印譜が再び蘇ったという感動も伝わってくる。

三、『清儀閣所蔵古器物文』第九冊（古印）と『清儀閣印存』・『清儀閣蔵名人遺印』に共通する印とその印を通じての交友

これまで、あまり知られていなかった清儀閣旧蔵の印譜である『清儀閣印存』と『清儀閣蔵名人遺印』について、出版経緯とそれに関わった人々について考察することで、本書になるまでに、様々なエピソードがあったことが分かった。また、『清儀閣印存』と『清儀閣蔵名人遺印』には、先に述べたように、印についての注釈があまり無い。それは、貴重な印の形をそのまま鑑賞者に伝えようとする編集者の配慮であった。しかし、張廷済の印学について理解するには、やはり、張廷済がそれぞれの収蔵印に対してどう解釈をしていたかが分かるものも合わせて見る必要がある。それは、『清儀閣所蔵古器物文』第九冊（古印）で確認できる。『清儀閣印存』・『清儀閣蔵名人遺印』の中にある印と『清儀閣所蔵古器物文』第九冊（古印）の印と、一部共通しているものがある。その主要なものを取り上げ、張廷済の印学について考察をする。

一、『清儀閣所蔵古器物文』第九冊（古印）と『清儀閣蔵名人遺印』共通の印①

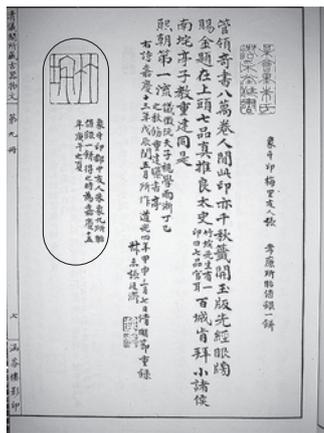
『清儀閣所蔵古器物文』第九冊（古印）  
（白文）

象牙印。郡中友人朱象九所貽。值銀一餅得之。時為嘉慶十五年庚午之夏。  
（書き下し文）

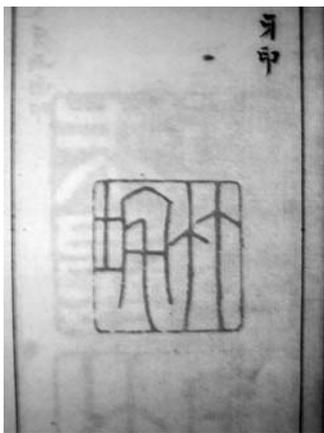
象牙印なり。郡中の友人の朱象九貽る所となる。值銀一餅之を得たり。時は嘉慶十五年庚午（一八一〇）之夏為り。  
（現代語訳）

象牙印である。郡中（嘉興）の友人の朱象九（伝無し）に貽られたもの。値（値段）銀一餅でこれを得た。時は嘉慶十五年庚午（一八一〇）之夏である。

『清儀閣蔵名人遺印』  
象牙印



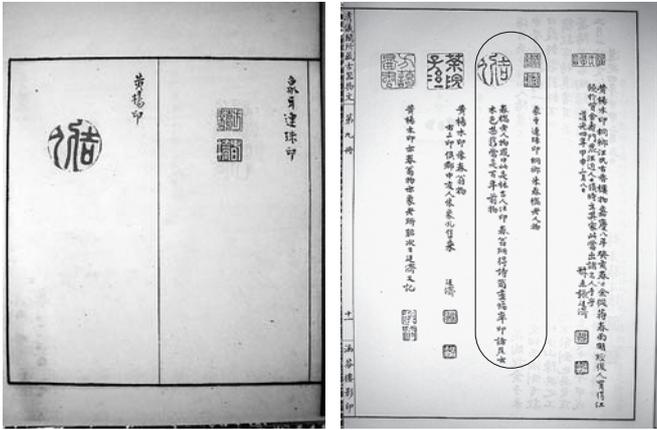
図十 『清儀閣所蔵古器物文』第九冊 P7-A



図十一 『清儀閣蔵名人遺印』「竹垞」の部分

『清儀閣藏名人遺印』では、「牙印」と書かれているだけだが、『清儀閣所蔵古器物文』には、象牙の印で、友人の朱象九から贈られ、銀一餅で入手したとある。そして、一八一〇年と年号まで書かれている。『清儀閣所蔵古器物文』は、跋を書いた年月日が記されその内容もあたたかも金石日記のような趣を見せているのが特徴である。

二、『清儀閣所蔵古器物文』第九冊(古印)と『清儀閣藏名人遺印』共通の印②



図十三 『清儀閣藏名人遺印』「方藹」、「春橋」、「佶人」の部分  
図十二 『清儀閣所蔵古器物文』第九冊 P11-A

『清儀閣所蔵古器物文』第九冊(古印)

(白文)

象牙連珠印。桐郷朱春橋老人物。

(書き下し文)

象牙連珠印。桐郷の朱春橋老人の物なり。

(現代語訳)

象牙連珠印。桐郷の朱春橋老人の物である。

(白文)

春橋老人物。或曰。此是林吉人信印。春翁所得。詩筒画幅率印諸尾。云

木色甚旧当是百年前物。

(書き下し文)

春橋老人の物なり。或は曰く。此れ是れは林吉人信印なり。春翁は得る

所なり。詩筒画幅の率ねの印諸の尾にす。云れは木色甚だ旧し。当に是

れ百年前の物なるべし。

(現代語訳)

春橋老人の物である。或はこれは林吉人信印なりと。春翁は得る所なり。

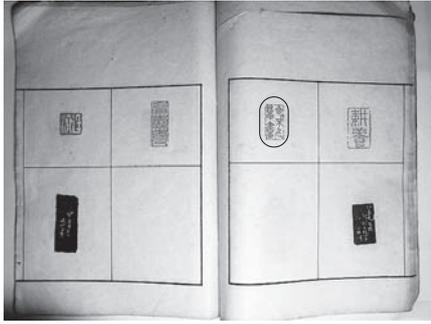
詩筒画幅の大体の印は多くは最後に押している。これは木色が非常に古

いものだ。これが、百年前の物であることはまちがいない。

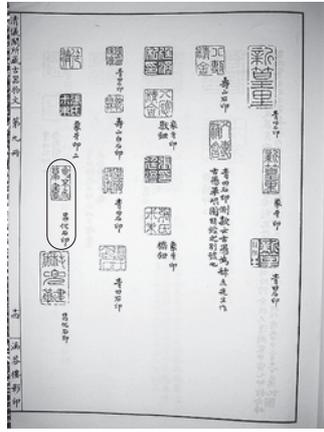
『清儀閣藏名人遺印』

象牙連珠印。

黄楊印



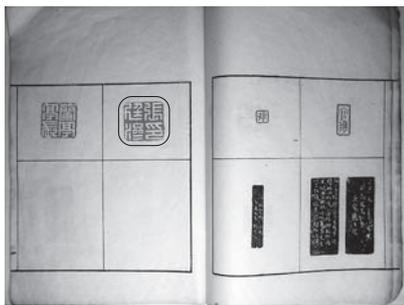
図十五 『清儀閣印存』「勿勿不及草書」の部分



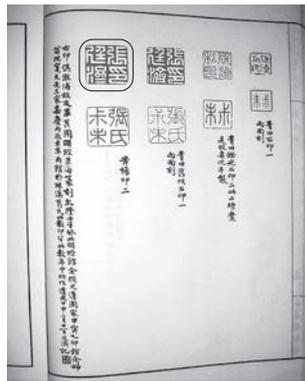
図十四 『清儀閣所蔵古器物文』第九冊 P14-A

三. 『清儀閣所蔵古器物文』第九冊(古印)と『清儀閣印存』の共通の印③

『清儀閣所蔵古器物文』第九冊(古印)では紙面真ん中の印二種が『清儀閣蔵名人遺印』の印と同じもの。印章が、『清儀閣蔵名人遺印』の方が若干太く見える。印泥や押し加減によって印は変わってくるので、形を比較するのも面白い。朱春橋老人の百年前の貴重な印のようだ。



図十七 『清儀閣印存』「張廷濟印」の部分



図十六 『清儀閣所蔵古器物文』第九冊 P14-B

四. 『清儀閣所蔵古器物文』第九冊(古印)と『清儀閣印存』共通の印④

『清儀閣所蔵古器物文』第九冊(古印)では、左端「勿勿不及草書」「昌化石印」と書かれた印と『清儀閣印存』の右側の印とが同じもの。印材の名前のみであるが、見ると書作品に押すための私印である。張廷濟が刻したものなのかは定かではないが、張廷濟没後百年以上経とする時代にまで受け継がれていたことが分かる。

『清儀閣所蔵古器物文』第九冊(古印)の内容、『清儀閣印存』には、印のみ)

## (原文)

右印、俱敢浦故友畢崑園明経星海篆刻。乾隆壬子癸丑明経館、余従兄蓬園家、甲寅乙卯館、余婦翁沈寛夫先生家、嘉慶丙辰至辛酉館、於珠溪葛氏此数印皆此数年中所作。

道光甲申三月十一日 廷済記

## (訓読)

右の印、俱に敢浦の故友の畢崑園明経星海の篆刻なり。乾隆壬子癸丑(乾隆五十八年 一七九三)、明経は、余の従兄蓬園の家に館し、甲寅乙卯(乾隆五十九年 一七九四)、余の婦翁沈寛夫先生の家に館し、嘉慶丙辰(嘉慶元年 一七九六)、辛酉(嘉慶六年 一八〇一)に至るまで珠溪の葛氏に於いて館せり。此の数印は、皆此の数年中作る所なり。道光甲申(道光四年 一八二四)三月十一日 廷済記

## (現代語訳)

右の印は、俱に敢浦の故友の畢崑園明経星海の篆刻である。乾隆五十八年(一七九三)に、明経は、私の従兄蓬園(張灝一七六八—一八一三)の家に泊まり、乾隆五十九年(一七九四)私の妻の父沈寛夫先生(生卒不明・伝無し)の家に泊まり、嘉慶元年(一七九六)から嘉慶六年(一八〇一)まで珠溪の葛氏のところまで泊まった。この数印は皆この数年中に作ったものである。道光四年(一八二四)三月十一日 廷済記

『清儀閣所蔵古器物文』第九冊(古印)にある、「張廷済之印」と『清儀閣印存』の「張廷済之印」が同じものである。この印は、畢星海(二七四〇—一八〇二)が、張廷済の従兄張灝(一七六一—一八一三)の家、張廷済の妻の父沈寛夫先生(生卒不明・伝無し)の家、珠溪の葛氏(珠溪は現在の四川省重慶市、葛氏とは、詳しいことは不明)を訪ねて滞在し、その期間中に刻した印だという。彼は、張廷済の私印を多く刻し、張廷済に寄贈している。印を通しての交友の一角が窺える。また、張廷済の亡き妻沈氏が刻した、張廷済の私印も載せられている。張廷済の妻についての記事は少なく、この印は、妻沈氏の貴重な史料になり、張廷済の家族の間でも印の創作をし、寄贈し合っていたことを窺わせる。ここで、畢星海についても紹介する。

畢星海(二七四〇—一八〇二)字は崑園、崑源、崑園、号は古愚。海塩の人。貢生(地方の学生)。文章を善くし、篆書、隸書、篆刻に工であった。著には、『六書通摭遺』がある。

## おわりに

『清儀閣所蔵古器物文』第九冊(古印)と、清儀閣旧蔵の古印や私印の印譜『清儀閣印存』と『清儀閣蔵名人遺印』の史料をもとに、張廷済の印学とはどのようなものであったかを考察してきた。すると、張廷済の印学は、彼の死後百以上経っても、後世の金石学者達に多大な影響をあたえ、中国の国学の一分野として尊ばれていたことが分かった。また、張廷済の古印に関する鑑識眼も鋭く、作られた時代・印章の内容・印材・人物・印の用途など詳しく分析されていた。そして、色鮮やかな赤

で印が押され、側款の拓本も取り、その余白に跋を付すスタイルは、視覚的にも洗練され、整った紙面になるので、内容の高度な専門性と研ぎ澄まされた芸術的センスがいつの時代になっても、人々の心を打ち、受け入れられることが分かった。そのために、太平天国の乱の戦災で失われた張廷済の書物だが、後の人々に求められ、復活することができたのではないか。

今回は、張廷済自身が作った印を探し求めたかったが、残念なことに、この三つの書物からは、見つけだすことができなかった。ほとんどが、印学研究の為に収集した古印や友人など交友関係のあった人々から譲ってもらった印であった。これらの印の他に張廷済自ら彫った印を探すが、これが今後の課題だ。

また、この研究をする中で、張廷済以後の金石学者たちも、張廷済の金石学・印学を学ぼうと積極的に史料収集し、著書として出版されてきたことが分かったので、張廷済の金石学は、どの時代にどのような形で人々の中に溶け込んでいったかも研究したい。そして、張廷済の書作品についても、まだ、明らかにならないうち、篆刻芸術と書作品と合わせて、根本史料からより研究を深めていきたい。

#### 〔参考文献〕

##### 《根本資料》

- 『清儀閣所藏古器物文』十冊 清・張廷済撰 民国十四年（一九二五）上海商務印書館 桐郷徐氏愛日館藏本景印  
『徐摯壯手寫清儀閣古印考釋』徐同柏著 道光一八年戊戌（一八三八年）一月一七日刊  
『清儀閣藏名人遺印』徐同柏主題・褚德彝著 甲寅（咸豐四年 一八五四年）

閏五月神州国光社

##### 《伝記資料》

- 『清代画史增編』三十七卷・補録一卷 盛薰輯 民国十六年（一九二七）有正書局  
『清画家詩史』二十卷 李澐之輯 民国十九年（一九三〇）寧津李氏刊本  
『甌鉢羅室書畫過目考』四卷附一卷 清・李玉葵撰 光緒二十三年（一八九七）男元振刊本  
『昭代名人尺牘集小伝』二十四卷 清・吳修撰 發行年場所不明  
『清代僕学大師列伝』二十五卷叙伝一卷 支偉成撰 民国十四年（一九二五）上海泰東圖書局排印十七年再版本  
『金石学家列伝』發行年場所不明  
『清代学者象伝』第一集四冊 葉恭綽輯 民国十九年（一九三〇）上海商務印書館景印本  
『清儒学案小伝』二百八卷 徐世昌撰 民国二十八年（一九三九）北京刊本  
『国朝書人輯略』十一卷首一卷 清・震鈞撰 光緒三十四年（一九〇八）金陵刊本  
『書林藻鑑』十二卷索引一卷 馬宗霍撰 民国二十五年（一九三六）上海商務印書館  
『皇清書史』三十二卷首一卷末一卷附録一卷附皇清書人別号録一卷 清・李放撰 号録・葉眉撰  
『清代七百人伝』六卷補編一卷附録五卷 蔡冠洛撰  
『清史稿』中華書局本  
『清史列伝』八十卷 清・闕名輯 民国十七年（一九二八）上海中華書局  
『新編金石学録』松丸道雄編 昭和五十一年（一九七六）九月発行 汲古書院  
《その他の資料》  
『清儀閣印存』褚德彝編 一九一四年四月 神州国光社  
『張元濟年譜』張樹年主編 柳和城、張人鳳、陳夢熊編 一九九一年二月第一版・北京第一次刷 商務印書館  
『太平寺史話』上下卷 鮑翔麟編 著嘉興市南湖區政協文史委員會

二〇〇八年九月(未刊本)

『清儀閣金石題識』張廷濟著 陳其榮編 徐士愷校刊 一八九四年 発行地不明)

『清儀閣金石文字拓編』翁方綱著 発行年不明 有正書局

『清儀老人遺墨』張廷濟書 一九一八年 天真精製翻印

『石刻資料新編』第四輯(七)(九)二〇〇六年 新文豊出版

『清儀閣雜詠』張廷濟編 一八三九年 清儀閣刻

(かわい なおこ

文学研究科国文学専攻博士後期課程)

(指導教員:長尾 秀則 教授)

二〇一〇年九月三十日受理